

素晴らしき須走を知りたい！

「すばらしい隊」養成講座 第3回講座概要

第1部:歩いて考える 五合目 小富士の魅力

座学「富士山」とは

■日時：令和3年10月16日（土）9時00分～9時30分

■場所：須走口五合目 山小屋 東富士山荘

■講師：米山 千晴 東富士山荘 代表



■講義概要

1. 富士山の基礎知識

- ー須走は、古来より官道の東海道から分岐して、籠坂峠を経て、甲斐国府へ抜ける官道の途中にある。そこから登山者の方が多く登られたという記述がある。江戸の最盛期には7万人登っている。
- ー富士山は標高3776m。頂上の年間を通して平均気温は-6℃。夏の2か月間の平均でも5℃。
- ー頂上の空気濃度は平地の70% (2/3) しかない。
- ー水が沸騰するのは、平地(1気圧)では100℃。山頂は88℃、5合目山小屋は92～93℃。山頂の早朝の気温はマイナス2～3℃その時の沸点は81℃。過酷なことが分かる。

2. 富士山の生い立ち

- ー富士山は度重なる噴火によってできた山である。三層三階建ての火山。
 - 10万年前：小御岳火山。おばあちゃん富士山。
 - 1万年前：古富士火山。お母さん富士山。
 - 現在：新富士火山。今の形容を成している火山。
- ↓
- 900万年前(島が本州にぶつかり伊豆半島ができた頃)：富士山がある所はまだ海
- 50万年前：活発な火山活動をしたのが、愛鷹山、箱根山、小御岳。その噴石物で駿河湾を埋めていき、次第に狭くなっていった。
- 10万年前：愛鷹山、小御岳が火山活動を休止。富士スバルラインの終点にある古御嶽神社の横の佐藤小屋と須走口の間位の所が爆裂的な噴火が起き、「古富士」ができた。
- 1万年前：新富士形成。新富士火山で大量の溶岩が流れ、「小御岳」と「古富士」を埋め尽くした。山頂から流れ出た溶岩流の先端部が清水町にある柿田川。総延長42km、蛇行しながら流れていった。
- 5000年前：静かだった富士山が爆裂的な度重なる噴火によって、3600mから3776mになった。その後、富士山は静かな時期を迎える。
- ー富士山は「小御岳火山」と「古富士火山」「新富士火山」と呼ばれる三つの火山が合体してできている。の三層構造。おばあちゃん富士山、お母さん富士山の上に今の富士山が乗っている。

- ー日本はフィリピン海プレート、北アメリカプレート、ユーラシアプレートの3つのプレートがぶつかりあっているところに位置している。ここで噴火、もしくは地震が起きた場合は、強大なエネルギーが集まる。今から314年前に大噴火したのが宝永の噴火。11月23日に噴火したが、16日間という短い噴火だった。直接死亡事故に至るような記述はないが、その後に至り、大変だったことは穀倉地帯を破壊してしまったということ。この地域で飢餓で亡くなられた方が数十万人いた。現在、いつ起きてもおかしくない状態にある。
- ー宝永山が314年前に噴火した時、須走地区で3mの降灰。スコリアと呼ばれるものが火山礫となって降り積もった。一昨年、須走支所の所に道路を作る時に調査をしてもらったら、建屋が焼けてそのまま残っている状態。馬返しの砂防工事をしている下の所、7mという降灰も記録されている。この付近では50cmの降灰がない。宝永の噴火が偏西風で東へ流れた。降灰物がない所、ある所がここですっぱりナイフのように切れている。今後こういう事が起きた場合、どういう風に流れるのか検討すべき課題ではないかと思っている。
- ーこれは、「天地返し」。宝永の大噴火でこの地帯は穀倉地帯が壊滅的状态になった。用沢地区で約1m50cmの降灰。1m50cm田んぼの上に噴出物が乗った。これを修復するのに67年もかかっている。その時に農家の人たちが行ったのは、「天地返し」。島原市に行ったが、向こうの方々も雲仙普賢岳で災害が多いので、知っていた。小山町とは災害協定を結んでいる。掘って下の層部を上へ上げ、掘ったところに火山礫を入れた。北駿地区の方々はこのように非常に大変な思いをされ、そして今がある。スコリアと呼ばれる富士山の噴出物は我々の生活にとっては素晴らしい恩恵をくれる。透水率が非常にいい。年間80億トンの雨、水を富士山が蓄えている。その蓄えを小山町、御殿場を含めた地域が恩恵を受けているが、また噴火した場合は怒る富士が我々に試練を与える。

第2部:体験編「歩いてみよう!五合目・小富士」

■日時：令和3年10月16日（土）9時40分～12時00分

■場所：須走口五合目、小富士

■講師：米山 千晴 東富士山荘 代表

ーナナカマドの木。七回かまどに入れても燃えない、薪としては使えない木。水分が多い。ナナカマドの実。赤い実はアミグダリンという苦味と毒の成分があるので、現在鳥も食べない。霜が降りたと同時にアミグダリンが消失する。実が下へ落ちたりして、鳥が食べる。アミグダリンが消失しなければ鳥も食べない。ナナカマドの実に鳥がたかって食べるという事はない。

ーオオカメノキ。大きい、水がめのような形をしているところから名前が付いた。別名、ムシカリ。虫が好んで食べる、虫が狩りをする。ナナカマドと違い、この実は焼酎漬けにすると非常においしい。さわやかなフルーティーな焼酎漬けができる。自家作用で甘みを出すので、あまり氷砂糖を入れない方がよい。黒くなっている実を入れると、黒い焼酎ができる。

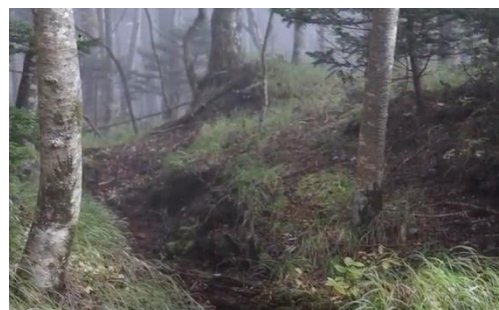


一五合目は昭和 33 年にこの道路が開通した。開通前は古御嶽神社から旧道（旧登山道）があり、そこを利用していたので、この道路が開通した時にはここは鬱蒼とした林の中。昭和 33 年から昭和 39 年に富士スバルラインができるまでのこの 6 年間の間、ここに五合目が設置され、すごい人だった。昭和 35、36 年に、富士急行バス(当時はボンネットバス)が、ここから下りていくのに 50 人も 60 人も乗車し、下りでブレーキを踏むので、須走の浅間神社の駐車場でアルバイトが 6 人程がタイヤに水をかけて、ピストン輸送していた。なぜかと言うと、ここら辺は全部人、バスに乗るのに 6 時間待ち。ここに人が座っていて、延々と古御嶽神社の上までつながっている。一日に運ぶ人は約 6000 人。ここで私どもは山小屋をやっていたが、お客さんがここに座っていて物があまり売れないので、売り歩いたという思い出がある。須走口はすごかった。ところが、昭和 39 年に富士スバルラインができたら、第一次登山ブームが起こった。五合目まで自家用車で登れるので、ブームになった。6000 人、7000 人のお客様が、昭和 41 年には年間 1000 人も来なくなった。2 か月で 1000 人来なくなった。時代の流れの中で動いていった。森林に囲まれた須走口の魅力は今後継承していかなければならないと痛切に感じている。



一ここが旧登山道。大正 13 年昭和天皇が皇太子の時に御登岳されているのがこの道。

一行者さんが行をした石段が今でも残っている。行場になっている。私が子供の頃、石碑や石柱が 6 基あったが、一つも残っていない。ここは太郎坊大権現というが、神仏の色々なものが祀ってあった。吉田口は今でも現存していて、馬返しに行くとすごい石仏がある。ここにはなぜないか。みんな盗掘された。道路の際にバス道を作ってしまったので、すぐ横に旧登山道がある。持っていこうとすれば持っていけた。須走口には仏像、丁目石、石柱一切残っていない。知られていないところがまだたくさんある。314 年前の宝永の噴火で降灰しているので、埋まっていることもあるが、ここら辺は埋まっていない。



ー古御嶽神社。昔は大きいお社だった。お社と併設して 12 畳くらいの座敷があった。雪の影響で倒壊してしまった。昭和 56 年頃、うちの叔父が講社周りをして立派なものを立て直した。現在のもの。

ー石橋宮司) 古御嶽神社と申し、元々この場所に鎮座し、下りてきた方が感謝の気持ちを受けるお宮さん。その他にもう一つ下ったところに御室浅間神社。昔は女性がこまで登っていいよという所。もう一つ、人間の俗の世界と神様の天上の世界を分ける境界という意味で雲霧神社があった。現在は管理が行き届かないこともあり、ここは、古御嶽神社と御室浅間神社、雲霧神社の 3 社をお祀りしている。あと、太郎坊＝天狗様も神様ではないが、この場所にも神様に近い存在である天狗様としてお祀りされている。この中の左手に天狗様のお面、両脇に天狗様の履かれている高下駄も安置されている。神様と天狗様のご恩恵をいただきながら富士山に登るという場所。

ー昔は非常に広い敷地を持っていた。約一町歩(1ha)という広い土地を有していた。文献を見ると、国から借りていたというのが伺いしれる。



ー原生林に入っていく。ウラジロノキ。別名アズキナシ。これが真っ白になっている。広葉樹で、標高の高い高山帯に生息している木。

ーダケカンバが斜めになっている。地球温暖化で気温が上昇している。シラビソの木も 3 年くらいで伸びる。木々の生育がすごく早くなっている。ここは昔、森林限界だった。森林限界は雪に押されて木が下へ向いて、雪の重みでまっすぐ育たない。伏せた状態でそこから復元していくので、先ほどのダケカンバのように曲がって上へ伸びる。150 年前はおそらくここにあまり木々がなく、頂上を仰ぎ見れたというのが分かる。一町歩ある神社敷地と言ったが、当時の修験道の方が修行をした場所。水垢離場があった。本来ならここは渡れたが平成 22 年の 3 月 6 日の富士山大土石流によって渡れなくなった。

ーこれが富士山から出た溶岩流。ここに滝がある。昔は滝に水がちょろちょろ出ていた。昔、水を汲みにここにきていた。2018 年までここに太陽の塔があった。石組で三角錐が組んであり、ここで行者さんが太陽にあたり、太陽を受けたエネルギーをいただいたという場所。ここに水垢離場があり、ここで水垢離をした。この先にある行場で行をした。小山町から 800 万をいただき調査をしてもらった。



ここが縦の長さが 150m ある大きい行場であることが分かった。ここが現存する行場の中で一番大きい行場。室町時代の「くらわんか」という磁器が出て来たので、その時代からここにそういうものがあることが分かった。このように古御嶽神社からここまで約 1ha の古御嶽神社の神社敷地。その中にあったのがこの水垢離場、行をした行場。これを史跡として残していきたいと思う。



ー人口構築物。石を組んである。ここから「くらわんか」が出た。水場が近いので調理をしたのではないかな？人間の手によって作られた石組。一番上、かなり位の高い方の行場だと思う。おそらくここにはお社か何かあったと思われる。沢の方から階段がずっと繋がっている。

ーこれは小山町教育委員会が 1 つ 1 つ番号を付けて管理している。東日本大震災で崩れた、これからも崩れる可能性はあるが残しておきたい。ここは宝永の大噴火の時の降灰がないので、残っている。そしてここには人が入ってこないの残っている。当時はここには木がないので遥拝できた。遥拝できるというのが第一条件。遥拝所兼行場。1300 年の年号の入っている懸け仏がこの上の所で出土している。1300 年にはここの登山道が開設されていた。



ーこれから樹種が違う所に入る。富士山は 3 月頃、雪代が発生し、幾度となく植生が壊滅状態になり、復活している。ここから先は玄武岩の溶岩で固定されているが、こちらは砂礫＝スコリアと呼ばれる層。

ーここは倒木が多い、木の墓場になっている。向こうは幾多の災害によって木が倒れ、二次植生、三次植生の森。こちらは一次植生。一次植生はカラマツ、シラビソ、コメツガという順で極双輪という林。なぜ木が倒れたか。原因は凍裂。この木はシラビソだが、非常に水分を多く含んでいる。マイナス 25 度の時に、中の水分が凍ってはじけ、裂ける。厳冬期を過ぎる頃に木に雪が付く、そこに重み加わり風が吹くと倒れる。凍裂すること自体、本州では珍しい。富士山は高山帯特有のシラビソの木、気象条件すべて揃っているのだからこういう事が起きる。

ー木が倒れてどうなるか…。天空に空間があると、次の植生がたくさん出ている。モミの木の実生。空間が開くことにより、日が入る。日が入ることにより、光合成ができ、そして植生が生まれる。森は倒木があっても、自然のサイクルにより、復元していく。モミノキは、一万粒のうち 1% しか発芽しない。そのうち巨木になるのは、2% ない。



一溶岩棚。一番高い層が1層 2m20 cm、その上 1m70 cmが1層。山体から流れ出た溶岩。たどっていくと、須走口の江戸屋さんの下、見晴らし館の上の側火山による溶岩。一番上が4700年前だろう。今から2300年前に御殿場泥流、山体の大崩壊によってできたのがまぼろしの滝一带。ここに剣丸尾（けんまるび）溶岩流、鷹丸尾（たかまるび）溶岩流があるが、小富士の下の北富士演習場を形成している。山体崩壊が2700年前に起こっている。一番高いここが沢だった。沢に流れ込んだ溶岩により、火山灰土を中心とした尾根が山体の大崩壊によって飛んで、北富士演習場を形成している。ここが残っている。溶岩が一番最初に流れてくるのが火山泥流、不純物を含んだ玄武岩。ボロボロの砂、小石を運んできている。玄武岩でもだんだん固い層になってくる。



一山中湖登山道。籠坂神社から伸びて、県境を登り、今で言う北富士連絡道の静岡県と山梨県の県境を登ってくるルート。今回、調査したが一ヶ所だけ演習場の中が歩けなかった。尾根から外れた所を歩いたが、ますみ峠から上はしっかりと整備されていた。私が小さいころ、昔はほぼ行者さんだったが、かなり登山者があつた。御殿場登山道より古い。今は崩壊し、跡形はない。一ここに山梨県が山小屋を建てた。県境がないので問題。1979mの小富士。地図上にある小富士はこの下。1904m。明治の図面を見ると、下が大観峰、こちらが小観峰という名前が付いている。県境はさらに下の1714mのところにある。そこに山中湖登山道がある。



一彰徳山林会の古い図面には、三島岳、富士宮の奥宮の大社の尾根の火口の壁まで直線で157m、御殿場口のこちらにある尾根のところに溶岩で印をしたそこが富士宮市の土地。それ以外の山頂の97%が須走だった。国土地理院が、三島岳から白山岳の向こう側が富士宮市、こちらが小山町だと決裁している。富士山はいつまでたっても係争に絶えない。昭和49年、富士山の8合目から上は浅間大社のもので一件落着いたが、ここは今でも争っている。



一小富士。入口にハンノキ、カラマツの幼木があることによって、この中にある苔が枯れない。富士山の樹林を形成するマント体と呼ばれる形状。これで乾燥した空気が中に入らないようにしている。これで中の苔や巨木が保たれている。

一山にある石積み(ケルン)。昔、山でお亡くなりになる方がいらっしゃるが、遺体を下げることができないので、お骨にするまでの間に目印として積んだのがケルンの始まり。

一風下側に植生が生えてくる。イタドリやカラマツなどの先駆植物が生えている。ここに植物がないのは非常に環境が厳しいから。絶えず風が吹いているので、なかなか植生が育たない。しかし、そこまで上がってきている。40年、50年前はそんなことはなかった。もう1000年もするとここは森。